

I 【事例】患者・家族間の思いの乖離を調整し、腎移植を行った血液透析患者の1例

患者：A氏，40歳代，女性．透析歴は約10年．原疾患は，糖尿病性腎症である．

A氏は，思春期に糖尿病を発症し，20歳代でインスリン治療を開始したが自己中断を繰り返していた．30歳代で腎機能が低下し，血液透析を導入．導入後，結婚し子どもを一人授かった．現在，夫と子どもの3人暮らし．近隣には，A氏の両親が住んでいる．A氏の母親も糖尿病であり，血液透析を行っている．

1 家族の治療法変更への思いを確認する

- point
- ▶ 治療法変更の思いには複雑で多様な理由があるため，丁寧に明らかにする必要がある．
 - ▶ 患者や家族間で思いが異なる場合があり，会話ではなく対話を導くことが重要である．

透析施設にA氏の夫から，生体腎移植に関する質問の電話があった．電話内容は，夫自らが腎臓をA氏に提供したいと考えていること，手術は可能であるか確認したい，という2点であった．看護師は，A氏本人から生体腎移植の話聞いたことがないこと，夫がこの電話をA氏には黙っておいてほしいと語っていることから，今回の治療法変更希望について，違和感をもった．そこで，医師や臨床工学技士，事務職を含めた多職種と相談し，夫との面談日を設けた．面談日は，A氏の非透析日を設定した．

患者と家族の
思いの相違

面談では，移植に対する夫の思いをまず確認した．夫は，【彼女との結婚を決めたときに，将来は私の腎臓を提供したいって考えていました．子どもが大きくなり，彼女の年齢も考えると，今しかないのかなって思っています．移植をして，透析治療から解放させてやりたいんです】と，移植への強い思いを語った．看護師は，A氏の考えはどうなのか，夫に確認した．夫は，【妻にはまだ何も言っていない．前に一度，移植の話をした際，大ゲンカになって．それでなかなか言い出せなくて】と，さみしそうに語った．看護師は，夫の思いを受け止めたうえで，生体腎移植は腎臓を提供するほうとされるほう両者の思いが一

【用語解説】

• 協働的意思決定

医療者から単に情報提供だけでなく，情報提供後も医療者が患者・家族とともに考え，話し合い，患者が自己決定すること．

• 対話

親しい者同士が他愛もない話をするのではなく，親しい者同士でも価値観が異なれば何度も話し合い擦りあわせをすること．